



甘美な再会

～思い出の恋人と小悪魔女子高生～

伊吹泰郎

挿絵／ロッコ

立ち読み版



目次

Contents

プロローグ	4
第一章 不器用な初体験	12
第二章 小悪魔少女の純情	72
第三章 想い、再燃	137
第四章 月明かりの下で	188
第五章 極彩色の睦み合い	238
エピローグ	282

登場人物

Characters

小金井 岳

(こがねいたける)

女子高の美術教師。学生時代は悪乗りしやすい性格だったが、数年前に別れた恋人の魅力を未だに忘れられず、恋人を作れないでいる。

藤村 明日香

(ふじむら あすか)

岳のかつての恋人。学生時代から優等生で控えめながらも、柔らかい物腰で人を惹きつける雰囲気がある。現在は喫茶店「グレーテル」の店長をしている。

大河内 紫音

(おおこうち しおん)

美術部に所属する少女。明るく元気な性格。しばしば岳をドキリとさせるような小悪魔っぽい言動をする。



「明日……香……っ」

自分と一つになるため、ここまで耐えてくれたのだ。少年は胸がいつぱいになり、恋人の乱れた髪の毛をぎこちなく撫でた。

とはいえ、快感も薄れていない。むしろ破瓜の痛みのせいか、襷の一枚一枚は助けを求めるように、亀頭やエラへ縋り付いてくる。膣肉の中に隙はなく、裏筋も牡粘膜も竿の表皮も焼け焦げそうだった。

(やばい……やばいやばい……やばい！)

怒張の付け根には、精液がマグマさながらドロドロと集まっていた。さっきのような瞬間的なものではない、本格的な絶頂が刻一刻と迫ってくるのが分かる。

「はあっ……はあっ……お……は……はああっ」

「んくううっ！ つっ……う、ああ……っ！」

何とか気持ちを紛らわさないと——と沸騰寸前の頭を働かせる間も、粘っこい汗が背中や脇腹の上を滑っていた。それが無性にくすぐりたい。

「く……っ」

せめて片手で届く範囲を拭えば、弾かれた汗はポタリ、ポタリ、結合部や明日香の下腹へと滴った。

「ふあっ……!!」

微かに反応する少女。貫かれた肢体は、痛み以外に対しても敏感になっているようだ。

(あ……さ、触ってみようか……?)

他の場所を弄ってみれば、この焦燥や明日香の苦痛も、多少和らぐかもしれない。となれば目に入るのは、未だ本人に握られたままの肉感的なバストだった。彼は生唾を飲んで口の中を湿らせる。

「明日香……また、胸、揉ませてくれないか……?」

「え……っ?」

明日香が薄く目を開いた。そこへ重ねて頼み込む。

「俺、また揉みたいんだ……」

岳としては大真面目だ。それが伝わったのか、明日香は「うん……」。左手を少しずつ上へどけていった。

改めて、二つの乳房が露わになる。さつきは愛撫に夢中だった岳も、今度はその形をじっくり観察できた。

表面には指の跡が赤く出来ていたものの、柔らかい曲線自体は戒めから解放される

と同時に蘇り、二つ並んだ特大サイズは小山さながらだ。さらにその頂で、乳首が自己主張するようにしこっていた。

岳は小生意気なピンクの突起を指先で摘み、左右一度に傾けてみる。

「ふあっ……やうああっ!!」

間髪を容れず、明日香の肉壺が縮み上がった。

「うくっ!!」

甘美な痺れに、少年も目の前がグラつく。ペニスは射精ギリギリの領域まで突入だが、辛うじて意識を乳房へ集中させて、汚濁の塊を竿の底へと押し込めるのに成功した。

（今の明日香の声って……っ）

痛がっているのとは少し違っていた。

念のためにもう一度、乳首を反対方向へ転がせば、

「ひあああんっ!!」

またも美少女は切なげにむせび泣く。

「待ってっ……そ、そこは摘んじゃ……ああんっ!!」

もう間違いない。明日香は胸を弄られると、苦痛以外のものも感じてしまいうらしい。

思いつきとはいえ、秘所以外を刺激するのはいい案みたいだ。男根の方も追いつめられかねないが――。

(よしっ、このままっ！)

少年は手を乳房へ張り付け、当初の予定通りに揉みしだきだした。

広げた指の間からは、柔肉がムニユリと盛り上がる。次にそこを押せば、膨らみはいよいよ卑猥に変形。

汗ばんだ肌は絶えず掌へフィットし、奥に息づく火照りや初々しい芯のようなものが、柔軟さの中でアクセントとなった。

女体の悶えには、思った以上に肉棒も振り回される。

「くおっ……おおおっ！」

雪崩れ込む危険な疼きに、岳は息を飲んでいった。しかし、欲望を二点へ分散させたのを糸口に、快感への免疫も出来つつある。最初はただ飲まれまいと必死だった牝驥の蠕動を、だんだん味わえるようになってきた。

調子づいた彼は乳房を根元から掴み上げる。乳首がさらに浮いたところを人差し指と親指で挟み込み、あたかも母乳を搾るように、端から端まで扱いてやって。

「い、あっ……胸……変っ……やっ、おかしいのっ……そ、そんなにつ……ひやああ！」

明日香の右手が顔からずれた。恥じらいつつ、息苦しさにも耐えられなくなったらしい。

露わになった頬や額は真っ赤で、唇は涎まみれ。優等生の面影ははしたなく崩れ、岳の肉欲もかき立てられた。

もう動いても大丈夫との確信も湧き起こった。彼は切なさを膾肉へなすり付けるように、逸物の角度を変えてみる。突き刺した肉棒で、窮屈な秘洞を開拓だ。

「ふやっ!! あはあああんっ!」

思った通り、明日香の口からこぼれたのは甘いよがり声。

むしろ岳の方が「おぐっ!!」と獣じみた声になる。熱いうねりで撫でられた牡粘膜が、今にも爆ぜそうだった。

免疫を付けられたなんて、単なる自惚れに過ぎなかったのだ。こんな気持ちよさ、とても制御しきれないわけがない。もともと恋人が痛みから逃れられたとなれば、我慢を続ける必要もなかった。

「う、動くぞ、明日香っ」

「えっ……嘘っ、待っ……!」

制止の訴えがこぼれる途中で、もう腰を引いている。次の瞬間、居並ぶ襷がカリの

窪みに引つかかった。

「おっ……っあううっ!!」

脳内に火花の散るような快感。喘げば思考力まで一緒に吐き出してしまいそうで、少年は慌てて唇を引き結んだ。

「ふあっ! はうううああっ!!」

明日香も同じく声を飲み込もうとしている。が、岳ほどには成功せず、可憐な唇は早くも綻びかけていた。

入口近くまで引いたら、再び突進。ペニスは元の形に戻ろうとしていた濡れ褌の群れを、膨らんだ切っ先で割り開く。

「あっ、やうっ……たけ……君っ……はううううっ!!」

「あ、明日香……ああっ!」

今度は無茶な速度を出さずに済んだ。その分、じつくり、ねっとり、喜悦が粘膜の塊へ注ぎ込まれる。少年が声を殺しきれなかったぐらいだから、明日香の顔もすすり泣くようにしかめられた。

岳は腰だけでなく両手を操るのも忘れない。汗びっしりな女体の上では、今も巨乳が淫らに歪んでいる最中だ。

膨らみを捏ねくる間に、鈴口と子宮口が二度目の衝突をした。こぞつて波打つ膣壁の群れの中、牡粘膜はひしゃげそうに疼く。

「す、すげっ……やらしい顔になってるぞっ……明日香っ！」

少年は悦楽を味わいながら、隠れていた少女の肉欲を穿り返す心境だった。

何せ、説教癖のある優等生が、自分の腰遣いで悶えてくれるのだ。否応なしに独占欲を呼び起こされる。

愛液も諸共にかき出して、ジュポッジュポッと室内に卑猥な音を響かせた。

「んあああっ……う、動かないでっ！ 動かないでええっ！ ひふううあああっ！」

真面目なだけに、明日香は快楽をなかなか受け入れられないらしい。肢体は今や茹だつたような熱さなのに、首をいやいやと横へ振り始めている。

「やだっ……変なの……！ 岳くううんっ！ は、恥ずかしい声っ……出てきちゃっ

……あふうううっ!!」

それは単なるポーズではなかった。本気でパニックへ陥りかけている。

「くっ……！」

少年はリズムカルになりかけた律動を急停止させた。

たとえ前後不覚になろうとも、もう明日香に無理をさせないという決心だけは見失

わない。

「おふうう!!」

無理に筋肉を固めたせいで、子種を竿の底から押し上げかけた。しかし尿道を絞って愉悦に耐える。

ゼエゼエと息を荒らげるうち、再び精液は潮が引くように奥へ戻っていった。ようやく身体のペースが整ったところで、

「あ……た、岳君……止まってくれたの……?」

呼び声に見下ろすと、明日香は気遣いと戸惑いが半々の目つきとなっていた。

「ああ……」

岳は無理に口の端を上げる。

「俺、すげえ気持ちいいよ。けど、明日香にも気持ちいいって思っほしいんだ。明日香はさ……せ、セックスつて、まだ嫌か?」

「あ……それは……」

少女の視線があらぬ方へ泳ぐ。考える間も股間を悩ましさに侵食されているらしく、吐息がやたら色っぽい。やがて、明日香は顔を背けたまま問い返してきた。

「岳君は……私がエッチになっても……軽蔑しないでくれる……?」

「当たり前だつ。エッチな明日香？ 大歓迎だよ！」

そんなストレートすぎる答えに、明日香の心も動いたらしい。チラリ、岳に目が向けられ、次いで恥ずかしそうに伏せられて、

「じゃあ……私……エッチになる……」

「おうっ！」

「……岳君に抱かれて……エッチに変わるの……っ」

「お、おうっ！」

ちやんと明日香の気持ちを確かめてよかった。

こんな告白を聞いた後なら、絶対に今までの何倍も気持ちよくなれる！

「ならっ……！ 行くぞっ！」

宣言し、少年はペニスを後退させた。蠢く肉壁にカリ首をさらし、極上の愉悦に酔いしれる。

「ふおおあっ！」

声を抑える気持ちも失せていた。

「うくっ、あうううっ！」

明日香の方はまだ嬌声を飲み込みかけているようだ。それを崩すように、岳は情熱

を籠めて剛直をねじ込み直す。

秘洞を貫通する逞しい動きに、今度は明日香も耐えきれなかった。

「んくうあああはっ！ 岳君っ……岳くうんううっ！」

右手で乱れた黒髪を、左手でシーツを握りしめる。混じりつけなしの絶叫も解き放たれて、秘裂が剛直を搾り立ててきた。

牝襲の反撃に、牡粘膜は沸騰しそう。岳は発奮して、休まない抽送へ取り掛かった。ズブツズブツ、と抜いては挿し、抜いては挿し、抜いては挿し。

愛蜜には破瓜の血も混じっていたが、明日香が官能に目覚めた今、鮮やかな真紅に痛々しさなど感じられない。

「やつんああ！ 岳くうんっ！ 私っ、こんなにいい！ 熱いのっ……熱いいっ！」
「うおっ……明日香あっ！」

明日香も完全に迷いを吹っ切ったらしい。適度な肉付きの美脚を自分から開いて、少年を迎え入れやすくする。

少年もそれに応えて男根の動きを速めた。ピストンに押された女体の上では、巨乳も激しく踊りだす。それが密着した掌に心地よい。

動くまいと足掻いていたのが、遙か遠い昔のようだった。官能神経は気持ちよさに

振れ、何度目かの突貫を引き金に、岳はのけ反るような体勢となってしまう。ペニスはグイッと上を向き、明日香の臍方向を激しく抉った。

「やうあああつ!!」

一際大きい明日香のわななき。どうやら、当人も知らなかった弱い部分を、亀頭が探り当てたらしい。

「ここっ、だなっ!」

岳は姿勢を保ったまま、立て続けに腰を前後させた。

「ふはあつ! 岳君っ……くやああん! そこは駄目っ……感じすぎちゃうっ、壊れちゃうううう!」

「言っただろ! 俺は明日香をエッチにするって!」

組み敷く少女を徹底的に追いつめる。ただし、少年だって亀頭を肉壁へ押し付けっぱなしなのだ。一度は先送りにした絶頂感が戻ってきて、尿道は精液の塊にこじ開けられかけていた。

「く……ぐうううっ! イっ、クううっ!」

無意識に呻いてしまった。そして言葉にすると、現実味は俄然増してくる。

「うっ……おおおっ!!」



岳は肩や首筋まで痒みに侵食されて、上半身を突っ張らせる。

「ふえんへえ……あおふっ……ふうあ……おひんひん……おひんひん……はああんっ……」

紫音の方は腰をくねらせていた。スカートが風で吹かれたカーテンさながらに揺れており、彼女が性欲を持って余しているのは確実だ。

ついにはその悩ましさを押し付けるように、すばまった唇が亀頭へ密着してきた。肉竿をストローに見立てて、ジュルジュルッと粘液を啜る。

「うっ……くっ!! うおうううっ!」

岳は前のめった。空気で振動させられた尿道が、煮崩れてしまいそうに熱い。あまり喘いだら声が家の外へ漏れかねないと思いつつ、愉悦に抗い続けるのはひたすら難しかった。

腰が揺れると、鈴口もずれる。唇から外れた亀頭は紫音の頬をかすめ、汗ばむ肌へ粘液を広げた。

「やうっ……ふあああっ!」

顔を汚された美少女は、それを催促と受け止ったように、自らペニスへ頬ずりしてきた。口を開き直して、舌に竿の下側を遡らせる。位置を譲った右手は根元寄りを撫

で回し、左手もそこへ寄り添って、蠢く十指で愛おしそうに節くれだつ幹をなぞった。顔の角度が上向いたので、岳は紫音の表情がどれだけ乱れているか見て取れた。彼女は泣きだす寸前のように。そのくせ舌は大胆に踊り続け、絡まる唾液と先走り液で口中が鈍い光沢を帯びている。

「せんせえのおちんちん……ヌルヌルが止まらなくて……やあん、どおしよお……あたし……これ……美味しくなってきたみたい……いっぱい飲みたいのお……っ」

「むっ、くっ!!」

一瞬、岳は教え子をもつと墮ちたかと思ってしまう。その下卑た望みは咄嗟に食い止めるものの、肉竿のこそばゆさはどうしようもない。

陰毛の近くで、舌戯は方向転換をして亀頭へまで戻っていく。途中で裏筋もエラも踏み越えて、その両方に狂おしい肉悦を植え付けた。

というより、唾液を塗られた通り道は、どこも例外なく悩ましい。

「つああお……おおおっ……!!」

尾を引く岳の呻き声。それが消えないうちに、少女は亀頭を丸ごと頬張ってしまうた。

「むあつ、ああぶつ！」

「んおおおっ!!」

岳も唸りを途中でおかしな具合に浮かせてしまう。

もはや狭い範圍をなぞられるのとは訳が違った。牡粘膜が口内の熱気に包圍され、裏筋もこれまで以上に圧迫される。左右から寄せられた口腔粘膜にエラの側面が撫でられ、鈴口は湿った吐息にさらされた。

「あぶつ……くああむ……っ！」

頬をすぼめた紫音の美貌の歪みは半端なく、卑猥にさえ見える。とはいえ、岳が僅かに下がりかけると、倍の速度で追いつがってきた。押し一辺倒の動き方で、エラも表皮もまとめて引き伸ばす。

「んぶふつ……うううくっ！」

「お、おおっ……おおっ！」

少女のくぐもった息遣いが廊下の先へ吸い込まれ、半瞬遅れて岳の呻きも続いた。もつとも、官能の衝撃はまだ序の口だった。

「ひうくっ!!」

勢い余った紫音は竿を根元近くまで啞え込み、ぶら下がっていた口蓋垂こうがいすいに亀頭をぶ



つけてしまう。

激突の勢いは岳へも跳ね返り、鈴口が燃えるように疼いた。しかも少女が苦しげにわななくと、強張りは竿全体を締め上げてくる。

「くああっ!!」

精液が滲み出しそうさ。少なくとも、カウパーの方はジュクツと量を増す。それを紫音がねぶり取り、合わせて顔も後ろへ下げだした。今度は陰茎を引っこ抜くような力強さ。

そうしてある程度まで引いたら、また前進。

「んっ……ふっ……くぶっ、ひうっ……うううっ!」

竿をしゃぶる時は、奥まで亀頭を誘い込んで咽るように口をすぼめる。離れる時も勢いたつぷり、唇の裏をカリ首へぶつけてくる。

「うああっ! つっ……んくふうううっ!」

気持ちが暴走しているのか、紫音は一回ごとに全力を振り絞っていた。ペニスはそれに容赦なく揉まれ、エラを小突かれてしまう。陰茎の表面がはち切れそう。中の神経は振れそう。

「おおこうちっ……! や、やめっ……やりすぎっ……だ!」

岳は呼びかけるが、紫音には聞こえないらしい。口淫は続行され、頭の脇でツイーンテールの髪がユラユラ揺れる。

「んぢゅっ……うぶあっ……ずぞぞっ！」

少女の喘ぎはどんどん粘っこくなってきた。唾液も溜まって、口を漱いでいるような響きだ。その下品なヌメリがさらなる速度をもたらすが、何しろ力を抜かないままのペースアップ。ペニスの痺れは許容量を超えて、ドロドロと溶けてしまいそう。

どうすれば、トランスさながらの紫音を鎮められるのか。

「くっ……お、俺はっ……俺っ、はああっ……！」

切羽詰まった中で岳が突然思い出したのは、童貞を卒業した日のことだ。はつきりとは覚えていなくても、どれだけがむしゃらだったかなら、頭の片隅に残っている。あの時、自分は明日香を相手に失敗と反省を繰り返したのだ。

紫音もあれと似た状況なのだろう。

そうだ。彼女が落ち着けないのなら、こちらでどうにかするしかない。

岳は菌を食いしばって自分を奮い立たせた。

まずは押し寄せる肉悦をさばくところから。

呼吸を紫音に合わせ、フェラチオをリードするべく腰を前後させる。唇が突っ込ん

できたら、少しだけ後ろへ引いて衝撃を和らげ、逆の動きの時には同じ要領でペニスを動かす。

「うくっ！ おっ、つおっ！ ふ、ううおっ！」

ブランクが長いだけに、思いがけないところでカリ首を搾られたりもする。そんな時にはドクンッ！ 海綿体が精液を送り出してきそうだった。

その都度、岳は筋肉を突っ張らせて切り抜ける。息むと毛穴がひとりでに開き、すでに身体中は汗びっしょり。

しかし何度も挑戦するうち、テンポを掴めてきた。

暴れ馬でも乗りこなすような心境で、反抗的な疼きを徐々に征服。

「ふあっ……あんっ……やっ……むっ、うふっ……」

喉を挟られなくなったのが影響したか、紫音の力も抜けてきた。直線的だった動きには無意識の変化が生まれ、顔が右へ左へと傾きだす。亀頭へめり込んでいた舌も、ウネウネ波打ち始めた。

「ふえんふえ……せんっせえ……のっ……おひんひんっ……やうっ……おひんほお！」

止まっていた卑猥な言葉も、再び吐かれるようになる。声音は甘え気味。責める側

だった彼女の方が、むしろ口腔粘膜を愛撫されているかのようだ。

と、淫語を紡ぐ舌先が、不意にエラへ引っかかった。

「うおっ!!」

急所を思わぬ方へ捻られた痺れで、岳の背筋はピンと反り返る。だが、もう進むのは単なる悲鳴ではなかった。

「今のっ……すげっ……いいっ!」

調子が出て、刺激が強まる刹那も愉しめるようになってきた。

(そうだ……フェラチオされるのって……こんな感じだった……っ)

柔らかい口腔粘膜に亀頭を受け止められるのも、ペロペロと転がされるのも気持ちいい。だが、汗だくでなりふり構わず一生懸命な紫音の姿が、何よりも魅力的だった。ツルンとした頬はペニスに裏から押され、歪な形に盛り上がっている。声も不安定に揺らぐ。

いつまでも愛でていたいし、快楽も味わいたい。ただし、元々達しかけたのを無理やり先送りしていたのだ。その気になったペニスはさらに硬くなって、着々と発射態勢に入っていく。

まだしばらくは持つかもしれない。が、溜まりに溜まった力をぶちまけるのだ。不

慣れた少女に口内発射はきついだらう。

岳は腹筋を固めて自白した。

「お、大河内っ……そろそろイキそうだからっ……もうっ、外に……！」

しかし、教え子は返事の代わりに口淫のペースを上げてくる。愉悦が一足とびに苛烈となつて、青年の肌は粟立った。

「おっ……おおいっ……おっ……俺はっ……も、もうっ……！」

「んんっ……はひうっ……んくううふっ！」

紫音に吐き出そうという意思は皆無だ。あるいはまた拒まれそうだと勘違いしたのかも知れない。少し遅れてはしたくないおねだりを吐き始めた。

「イツ……へえっ……あんっ……ふええき……ほひいのおっ！ 飲まふえてええっ！」

「くおっ……そ、それって苦しいぞっ！」

「いひのっ……おふっ……いいのおおっ……ぜんぶだひてええっ！」

薄く開いた目で岳を見上げる。

そして言うだけ言うと、精液を汲み上げるポンプさながら、愛くるしい顔を一層忙しく前後させ始めた。

「んくっ……あおっ……んはっ……ひおお……！」

長い髪が踊り、額や頬の上で玉の汗が幾つも滑る。

舌も亀頭を叩いたり、あるいは裏筋を素早く舐ったり。

「あっ……ああっ、分かった！」

岳も一瞬考えた後、快感を食するためのものにピストンを切り替えた。

教え子が下がれば自分も下がる。あるいは一緒に前進をする。亀頭で喉を挟らないよう、ペニスの角度を調節すると、切っ先が連続して口蓋や舌へぶち当たった。パンパンになった牡粘膜がひしゃげ、次の瞬間には張り巡らされた神経が一斉に痺れる。

もはやどれだけの時間が過ぎているのか分からない。自分達が玄関にいることすらどうでもよかった。

とことん熱く、汗のべたつきは増す一方だ。自分の体温だけでなく、紫音の火照りも、肉棒から全身へと拡散されているようだった。

「大河内っ……イクッ……俺っ、もうイク……！」

「ふえんっ……ふえっ……うむっ……は、おっ……あおおおっ！」

「こっ、壊れそう……なんだ！」

気が付けば、迫るザーメンの量は岳の予想を超えていた。それでも怒張は汚濁を蓄

積し続け、もはや調節不能な域に。

こみ上げる危機感。だが、それも一瞬ごとに心地よさへすり替わった。

そしてついに剛直が震える。汚濁も尿道を駆け上る。

「で……えっ、出るううっ！」

付け根どころか、ペニスの内部全体が無茶な幅まで拡張されて、最後に小さな鈴口も問答無用にこじ開けられた。

「うああうっ!!」

「んっ、くううっ!!」

岳が天井を仰ぐ足元で、紫音も四肢を竦ませていた。

ペニスの先端は彼女の舌へ突き付けられて、スペルマもそこへ飛びかかる。濁流の勢いは易々とは失われず、飛沫を散らし、さらに口内へ溢れかえった。

「んぐっ、うっ、うっ……ふうううっ！」

粘り気で喉を塞がれて、苦しそうに歪む紫音のあどけない顔。

唇も、舌も、頬も、全てが硬直し、ペニスを四方から押さえられた岳にも新たな愉悦が雪崩れ込んだ。

「うおあああっ!!」

ドクンッドクンッとさらなる白濁が打ち上げられた。こちらも量は物凄く、今度こそ精液の通り道が破裂してしまいそう。

「ひむううっ!!」

紫音の引き攣りもひどくなり、二人揃って身動きさえままならなかった。

「……う……く、あ……」

「……は……あ……ああ」

岳は耳鳴りがして、頭の奥をチリチリ焼かれるようだ。

しかし固まってしまったのが同時なら、息継ぎできたのもほぼ同時。岳はピクツと手を浮かせ、紫音は舌を裏筋から離す。

「ぶはっ……あ……お……」

肉棒が唾液まみれの唇から、ゆっくり吐き出された。根元側からだんだんと現れる竿の上では、数種類の体液が白くて分厚い膜を作っている。最後に鈴口が出てくると、紫音との間にも太く糸を引いた。

「んっ……あっ……うう……っ」

空中で粘液の糸が切れるのを見届け、紫音は口と目を閉じる。俯いて一拍置くと、ゴクン。精液を嚙^{えんか}下する音がした。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

●KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

●二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

●二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

●二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!